Book Review

李栄薫 著『反日種族主義 日韓危機の根源』（文藝春秋）を読む

六人の初老の男はなぜ韓国を批判したのか

鄭　大　均
（東京都立大学名誉教授）

本書はそのプロローグで韓国は「嘘の国」であると記して読者を驚かしてくれる。「この国の政治は嘘のパノラマでした」「この国の歴史学や社会学は嘘の温床です」「嘘の学問が嘘の歴史を作り（中略）、その教育を受けて育った世代が遂に大法院の裁判官にまでなったのです」といった具合である。

この本は六人の初老の韓国の男たちによって編まれているが、こんな過激な自己批判の言葉を誇り高き韓国人から聴くということは滅多にない。そんな言葉に接したときには少し考えてみた方がいい。なぜ著者たちは自らの尊厳を傷つけるようなことをいうのか。この言葉は誰に向かって語られており、「反日種族主義」というこの本のテーマとどのように関わるのか。

本を手にして頂ければすぐに気がつくが、ここに書かれているのは韓国では定型を逸脱した議論ばかりである。韓国の民族主義が「種族主義」的性格を持ち、シャーマニズムと深く結びついているとか、韓国教科書にある朝鮮総督府の収奪論には虚偽が多いといったことは、たとえそう考えても、口にすべきではないことであり、その禁忌を破ったら「親日派」の烙印が押され、法的処罰を受ける場合もある。

だとすると、プロローグにある「嘘の国」論はその禁忌をこれ以上ないほど派手に挑発する態度であるように思えてくる。そしてそれは、実際に衝撃を与え、ベストセラー

になったが、しかしそれについての議論が喚起されるという状況までは作り出し得ていない。

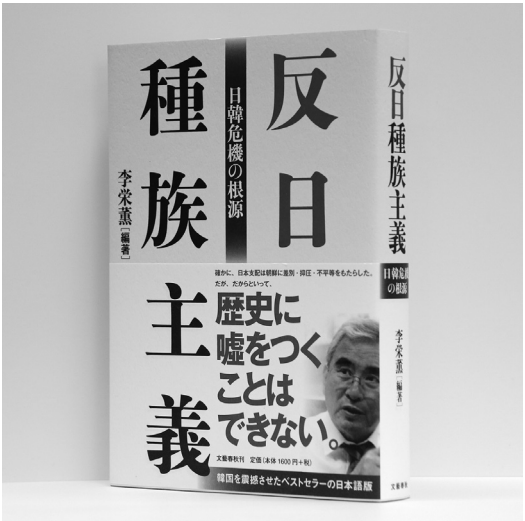
では、そもそも編者の李栄薫氏やその仲間たちはなぜそんな危ない闘いを挑んだのだろうか。「反日種族主義」とは日本に対する蔑視や偏見やステレオタイプの思考や態度を意味するのだと私は解釈しているが、それは韓国人を知的、道徳的に退廃させるだけではなく、韓国が維持してきた自由民主主義のナショナル・アイデンティティをも危機に陥れていると考えるからであろう。原書版の副題は「大韓民国危機の根源」である。本書はその危機を韓国人読者に訴えるものであり、六人の男たちはそれぞれの分野で「巨大な文化権力に突進」しているのである。

日本の読者はだから「嘘の国」の記述を見て、「ああやっぱり韓国人は嘘つきなんだ」と考えて安心するのは止した方がよい。李氏は確かにこの国の歴史学は「嘘の温床」だという。が、その後には「嘘は主に、二〇世紀に入り日本がこの地を支配した歴史と関連し、誰はばかることなく横行した」の文がある。歴史学が「嘘の温床」だとしても、それが胚胎しやすいのは日本統治期の分野なのだと記している。

それにしてもこういう衝撃的な本を突き付けられると、他国を理解することの難しさを考えさせられる。李栄薫氏はたとえば韓国には日本よりも明瞭な「嘘つき文化」があるというが、それは韓国が日本に比べ、「嘘」を抑制する文化に欠けていることを意味するのだろうかと考えてみる。そういう面もあるに違いない。しかしそうすると、なぜ「嘘」が特定分野に胚胎しやすいのかが分からなくなる。

だとすると、この嘘は文化的要因というだけではなく状況的要因によっても生じているのではないかと思えてくる。「土地気脈論」や「白頭山神話」の例は確かに文化的要因から考えた方が理解しやすいであろう。しかし、それが韓国の歴史学者、それも日本統治期を専門にする学者に蔓延しているとしたら、それは彼らには嘘を語ることが他分野の者より強く期待されているからと教えた方がいいのではないか。嘘を語らなかったら、彼らにだって「親日派」の烙印を押される危険がある。

当初、慰安婦の問題に韓国人は無関心だったというのに、日本の左派・リベラルたちが熱心に宣伝するものだから、やがて韓国人もそれに同調、今ではそれを政治・外交的に利用している慰安婦の性奴隷説だって、これは状況的要因

によって生じたと考える方が分かりやすいであろう。つまり、韓国人の「嘘」には日本人が韓国人に強いた「嘘」もあるのであって、「嘘」を支える構造は今でも健在である。だとしたら、われわれが問題にすべきはその国際連帯の構造であろう。

それにしても、これは韓国に百年に一度しか生まれないような本である。六人の初老の男たちの勇気に敬意を表しつつ、しかし本を読むときには、批判精神も忘れないでいたいものである。